対談・交流
胡桃沢伸さんと大兵庫開拓団2世の皆さん

第3部は、山下文生（ふみき）さんにスライドを使って「大兵庫開拓団と私」と題して話していただいた。

兵庫県出石郡高橋村（現・豊岡市但東町高橋地区）は、第13次大兵庫開拓団（高橋村満州開拓団）として1944年3月、103戸443人が満州、黒竜江省の蘭西県北安村に送られた。45年8月ソ連侵攻の中で開拓村は集団入水を強いられ298人の命が奪われた。山下さんの父・山下幸雄さんは当時12歳。4人兄弟と父母の6人家族の中で唯一の生存者となる。「現在父は88歳、私は61歳。父が生き残ってくれたからこそ、私がここにいるのです」「私は、大兵庫開拓団の2世です。これからも戦争の悲惨さ、命の尊さ。何よりも平和の大切さを語って行きます。」と話された。

この後、胡桃澤伸さんと大兵庫開拓団2世の皆さんとの対談交流を行った。（石打 謹也）

出演者の皆さん

胡桃沢 伸さん（1面で紹介）

石田 拓男さん（明石市大久保、在住）

石田さんの父（義雄さん）は兄弟4人と母の6人で満洲に行き父は現地で結婚した。開拓団では国民学校の教師だったが、途中獣医になるための研修に派遣され、後に徴兵され、シベリアに抑留された後帰国した。次男も徴兵されシベリアに抑留された後、帰国した。残された家族は全員が避難時に入水した。妹（多美枝さん）だけが、生還した。

シベリアから帰った義雄さんは再婚し、拓男さんらが生まれた。

宮垣 千恵子さん（豊岡市但東町中山、在住）

宮垣さん（旧姓安井）の父（清志さん）は妻と妹、長女の4人で満洲に行った。敗戦間際の8月10日に徴兵され、残された家族は避難時に全員自決した。父は敗戦とともに解放され、8月20日に生き延びた人たちが収容されている病院跡に戻ったが、家族は全員が自決していた。

1人で引揚げ、再婚し、千恵子さんらが生まれた。千恵子さんは結婚して宮垣姓になった。

山下 文生さん（豊岡市但東町平田、在住）

山下文生さんの父は祖母、両親と子供4人と満洲に行った。祖母は現地で病死、両親と子供4人は入水したが、父の幸雄さんだけが生き返った。幸雄さんは孤児となった。帰国した幸雄さんは親戚に預けられた。その後、独立結婚し文生さんが生まれた。父の幸雄さんは村の人たちが満洲で起こったことを話したがらない雰囲気の中、語り部として満洲で起こった事件を伝える活動を続け現在に至っている。文生さんは今年定年を迎えた。2世として父と共に高橋村の事件を伝える活動をしている。

司会：コスモスの会代表 宗景 正

対談で発言する宮垣さん

宗景：胡桃沢伸さん、そして兵庫県旧出石郡高橋村から満洲に送り出された大兵庫開拓団の2世の方3名をお迎えして対談を進めたいと思います。

4年前のこの集いに旧高橋村の大兵庫開拓団の石坪馨さんをお招きし、体験をお聞きしたことがありました。今日は改めて開拓団の2世の皆さんをお迎えして、親たちが体験した開拓団についてお話を伺います。

胡桃沢さんの祖父が送り出した河野村開拓団と大兵庫開拓団には共通点があります。入植が同じ昭和19年春で、しかも敗戦時に集団で自死しているのです。石田拓男さんからお願いします。

石田：自決現場から生還したのは私の叔母にあたる長女だけでした。父は開拓団から獣医の学校に派遣され、敗戦直前に徴兵され、そしてシベリアに抑留された。父はシベリアから帰り再婚し、そして私が生まれた。自決を免れ帰国した叔母は現在も京都府京丹後の久美浜で元気に暮らしている。私はいつも思うのですが、もし、父が満州で結婚していた女性が生きていたら私はここにいなかった。不思議な気持ちになる。

父や叔母が日本に帰ってみると、親戚の人に世話をお願いしていた、あるはずの家が、他人の手に渡っていたので、住むところがなかった。私は昭和23年生まれです。しかし、実はこの開拓団のこと、歴史について知ったのは50歳を過ぎてからだった。多くの2世たちも同じだと思う。親たちはこの悲劇を言わなかった。言わなかったというよりも言えなかったのだと思う。

宮垣：私は石田さんと同じ昭和23年生まれで、私が生まれる3年前にこんな悲劇があったとはまったく知らずに大きくなった。父は自分が徴兵された後の家族の自決をどのように聞いたのかわからないが、1人で帰ってきた。そのまま京都に行って仏門に入ろうと思っていたようだが、親戚から、安井家が無くなってしまうので、子孫を残さないといけないと言われ、母と結婚し、私と妹と弟が生まれた。

父はとても明るくて、かつてそのようなことがあったことを思わせなかった。それでもだんだん色々なことが分かってはきたが、なんだか触れてはいけないような気がし、父にも母にも聞くこともなく大きくなった。でも家には満州開拓団と記した墓があり、ずっと家では墓参りをし、母も大切にしていた。そのことも不思議なような感じで、幸せに過ごしてきた。

父も母も亡くし、主人を亡くしたので少し自分のことを考えてみようかと思うようになった、（3面へ）

大兵庫開拓団大河内部落の出発式
1944年3月

これまで触れなかった私の生い立ちの原点みたいなものも考えてみようかなと思うようになった。

父は満州で亡くなった家族の供養のため65歳くらいになって得度を受け、私が結婚して間なしに、奈良に引っ越した。仏門に入ったのだった。70歳で亡くなったけど、たぶん満足した人生を送ったのではないかと思う。父は私たちに精神的遺産を残し、私は命をいただきこの場所に立たせていただいている。命の大切さを伝えていかなければならないと思っている。

胡桃沢：宮垣さんのお父さんの僧侶になった話を聞いて、私のじいさんも宗教的な救いを求めていた。近くに天理教の教会があり、そこの戦争に協力しなかった人に会っていた。しかし、じいさんはそこで救いが得られなかった。宮垣さんのお父さんは宗教に求めた。どうにもならない苦しみを背負うと、その中で何とかしたいという気持ちになるのだと思う。

集団死の話になっているが、私はじいさんと村の集団死を知る前に集団死のお芝居を書いた。その時、関心のある所に聞きに行き、それを元にした。沖縄戦ではたくさんの集団死があり、研究がずいぶんされている。当時沖縄国際大学の石原昌家さんという研究者の方にお会いして、集団死がなぜ起きたのかを聞いた。それは教育の成果だろうと言われた。皇民化教育で「死してお国のため」があまねく教えられていたので、その道に沿って最後は死のうとなるのだと。逆に言うと生きるという教育がいかになされていなかったのかということだ。困った時にいかにして生きるか、助け合うんだということが教えられていたなら結論がちがったと思う。もう一つ沖縄は集団死に至る前に戦っていたアメリカ軍がどんな軍隊か知っていた人たちがいた。ハワイの移住から帰っていた人たちがいたのだ。この人たち、降参したら命は助けられるんだということを知っている人が集団の中にいると、その集団は白旗を挙げて降参して生き残っている。降参することを知ることで生きるか死ぬかが分かれた。

山下さんの話の中にあった、自殺を止める力があれば、止められた。そういうこと、そういう教育とはとは全く逆のことを国はやっていた。その結果だったと思う。

山下：私の父は「死して辱めを受けず」ということを言っていた。開拓団を狙った暴徒たちは、日本人を殺そうと思って襲ってくるわけではない。これまでやられてきたので、仕返しをしたいという気持ちはあり、服とかお金とかが欲しかったわけで、日本人を殺そうと思って暴徒化したわけではない。追いつめられていたけれど、白旗を上げて「降参だ、助けてくれ」ということが言える指導者がいたら、死んだりしなかったかもしれないのだ。

宮垣：父は（敗戦間際に）召集され、自分が満州に連れてきた弱いものばかりが（開拓団に）残り（亡くなった）。その家族への思いは、自分が1人だけ生き残った分だけ強かったのではないかと思う。苦しかったのだと思う。この年になってやっと父の思いが、わかるようになった。父は1人生き残って帰ってきたということが、すごく辛かったと思う。私はおかげで命をいただきましたけど、父は亡くなった家族を供養してあげたいとの思いが強かったと思う。だから、私たちに接するときはいつも明るくて、孫たちもすごい楽しいおじいちゃんしかしらないと言います。心底は強い念願というものがあったと思います。そういう面では、私たちに精神的遺産を、しっかり残してくれた。ありがたいと思います。

石田：集団自決にいったのは、誰がその方向へ引っ張っていったからで、そうでないなら、このような大きな自決はひょっとすると起きていなかったのではないかと私は思う。そのあたりの細かい事情が分からないのが残念です。今でも悔しいという思いがある。

胡桃沢：先ほどの番組（映画）の最後に名前を読み上げていたと思うのですが、名簿をみるとグワッときます。名簿には同じ苗字が並んでいる。20代、30代の女性の次に0歳、1歳と子どもたちが並び、次の家にいくとまた並び、さらに次でも並んで続くわけですよ。見ただけで、たまらなくなる。集団死というのはそういうことですね。

（4面へ）

大兵庫開拓団の自決現場（現：黒竜江省蘭西県双安村）
呼蘭河が氾濫し溢れた水面にこの丘の上から入水し、
約300人が亡くなった。（2017年6月29日撮影）

大兵庫開拓団の慰霊碑
豊岡市但東町喬橋地区一宮神社
境内（2022年8月17日撮影）